

平成 22 年度 第 1 回 柏原市文化財保護審議会 会議録

日時 平成 22 年 8 月 18 日 (水) 午後 3 時 00 分～午後 4 時 10 分

場所 柏原市立歴史資料館 研修室 (資料館 3 階)

出席者 委員 塚口義信、置田雅昭、綿貫友子、岩城卓二、長谷洋一、橋寺知子
事務局 稲田邦敏 (教育長)、岡本彰司 (部長)、
宮本知幸 (次長兼課長)、桑野一幸 (課長補佐)、
安村俊史 (主査)、石田成年 (主査)、山根航 (囑託)

次第 開会 (午後 3 時 00 分)

会議録署名人選任 岩城委員 長谷委員

議事 市所在文化財等の動静について

平成 22 年 4 月 1 日付事務局人事異動について

その他

閉会 (午後 4 時 10 分)

議事 市所在文化財等の動静について

- 1、安福寺所蔵「夾紵棺」について
- 2、「中家」史料について
- 3、「鳥坂寺跡」の範囲確認調査について
- 4、国登録文化財「天理教北阪分教会」について

(事務局開会挨拶)

<教育長> 今回の審議内容は大きくは2点。柏原市所在文化財の動静について細かくは4点。1点目は安福寺所蔵の夾紵棺、2点目は大和川つけかえに関わる中家資料、3点目は鳥坂寺、4点目は国登録文化財の天理教北阪分教会について担当からご説明、ご報告する。

<石田> 施行規則第26条第1項の規定により塚口会長により議事進行する。会議録署名人は事務局からのご推薦で岩城先生、長谷先生にお願いする。本日の会議は委員6名の参加を得ているので施行規則第26条第2項の規定により成立している。

人事異動について報告。

<塚口> 市所在文化財等の動静について4点。まず安福寺所蔵の夾紵棺について事務局から。

<安村> 玉手山の安福寺が夾紵棺の一部を所蔵している。現在企画展において展示中で、会議終了後にもご覧頂きたい。発見の経緯は昭和30年代に関西大学が玉手山の古墳の調査で安福寺に寝泊まりしている時に床の間にあった板を夾紵棺ではないかと発見した。先代住職が本堂床下にあったのを見つけ床の間に置いており、それが関大の学生の目にとまった。どこの古墳に伴うものかはわからない。夾紵棺は布と漆を何度も重ねて作った棺で、これまでに安福寺の物を含め8例しかない。高松塚古墳のものも木棺に漆を塗っているだけであれば夾紵棺とは呼ばない。天武持統陵の天武天皇の棺が夾紵棺とわかっている。牽牛子塚古墳は一説には斉明天皇の古墳かも知れない。平野塚穴山古墳は茅渟王の古墳ではないか。阿武山古墳というのは藤原鎌足の墓でまちがいないであろう。そういった天皇クラスでしか使われないような棺が安福寺にある。1枚の板のようになっているが、これは棺の小口の部分に当たるのではないかと考えている。今まで発見されている夾紵棺はほとんど麻で出来ており、絹を使った確実な礼は埼玉県の八幡山古墳に一つあるが、厚さが1センチほどしかないので棺ではなく容器ではないかと言われている。棺になる物で絹を使っているのは安福寺の物しかない。発見されている中では最高級の夾紵棺であると言える。昭和30年代に猪熊先生が文章を書いておられて聖徳太子の棺の可能性があるのでないかと指摘されている。安福寺の近くに天皇クラスの終末期古墳はまず考えられない。安福寺は江戸時代に叡福寺とその南にある西方院とそことしきりに交流している。江戸時代のいつかの時期、幕末、明治の始めのいつかの時期に何かの事情で安福寺に入ってきたのではないかと考えられる。夾紵棺の板状の物が小口の部分として復元できるとすると、聖徳太子墓の棺台に納まるのが猪熊先生に指摘されており可能性としては最も高いと考えている。非常に丁寧に作られた物で、今までどこにも公開されていないが今回の展示が終末期古墳をテーマとしているので安福寺の了解を得て展示している。安福寺はいろいろな宝物を所蔵している。美術品、仏像、お経、古文書等、尾張徳川家の菩提寺であるの

で非常にたくさんある。現在も重要文化財に蒔絵の箱が3件指定されており大阪市立美術館に寄託されている。安福寺の資料については調査しなければならない。まずは夾紵棺を市指定文化財にしていきたい。所有者の内諾は得ている。ただ寺であるので檀家の了解が必要であるが、檀家総会等で説明する必要はあるかも知れない。候補として考えてはどうだろうと考えておりご審議いただきたい。

<塚口> 次回委員会で諮問を頂戴し、その上で指定する方向で考えていきたい。

<置田> よく残っていたと思う。夾紵棺は滅多に残らないので。塚廻古墳から出てきているのは中が赤漆だったと思うが安福寺のは。

<安村> 外側はちょっと赤いけれど朱ではない。

<置田> 数が少ないので重要な物だと思う。

<塚口> 資料の中に岡田文男先生の論考がある。苧麻、からむし、麻の種類植物、これに漆をつけて重ね合わせた物をいわゆる夾紵という。奈良時代に布を貼り重ねた漆製品を塞と称したことが明らかな以上、現状では安福寺蔵品や牽牛子塚古墳出土の漆塗り棺を塞と呼称するのが妥当と思われる、と書いておられるがこの点に意見は。

<安村> 塞という資料がどこにでてくるのか調べたが原典がわからない。塞という字に漆塗りの意味があるのか大漢和等でもでてこない。

<塚口> 絹を接着剤を混ぜた漆を塗ったそういうものを塞というのは聞いたことがある。どこに書いてあるのか知らない。高松塚古墳の漆塗り木棺が出た段階で、絹とか麻とか種類にかかわらず布に漆を塗っている物を夾紵と皆さんが言っておられ、一般的な辞典でもそうなっているのでは。絹でも麻でも夾紵であって、素材にこだわらないと。高松塚の木芯乾漆棺がでてきたころからそう聞いているが。

<安村> 紵に麻の意味があるのは理解している。夾紵棺と呼んでいいと思う。

<塚口> 厳密に否定すると余計にわからなくなるので、その点もう一度検討を。

<置田> 中国語で言う場合と日本語で言う場合と意味が違う。夾紵の方がわかりやすい。

<塚口> 念のためもう一度検討したい。元来竹の皮をむいた物で編んで漆を塗るという技法。香芝市で出ている漆塗り籠棺。あれもそう呼んでおり、材質は竹ではなくそれと同じようなものかなと。考古学では古代の帯の金具が出てきた時は帯金具という。古代史では銚帯という。銚帯というのは史料に何回も出てくる古代の専門用語。銚帯と言うが資料館では帯金具と書いてあり帯金具の方がわかりやすい。夾紵棺という名称でいいかどうかもう一度検討を。仏像の名称に関係しては。

<長谷> 奈良の寺の資財帳の中でネンは塑像を示して、ソクは乾漆仏を示していることがある。

<塚口> 平野塚穴山古墳では出てきている量が少なく薄い。あの厚さで棺として使えるかどうかを調査に参加した角山先生に聞いたことがある。十分に使えると。年月が経つにつれて薄くなる。量が少ないのは持ち出された可能性が非常に多い。もともと口

が開いていたので。特殊夾紵片と呼ばれているもので。棺でない可能性もあるが棺の可能性の方が大きいと思う。

<岩城> 現在お寺ではどう保存されているのか。

<安村> 今は布でくるんで蔵で保存されている。美術梱包で借りているので、そのまま返却してそのまま保管していただく。蔵は温湿度は割といい状態。

<塚口> この件については次回の会議の時に諮問を頂戴して、柏原市の文化財として指定する方向で考える。次に中家資料について。

<安村> 宝永元年、現在の柏原市役所の前から堺の海に流れるように大和川をつけかえられ、そのつけかえ運動に中心的に関わった中甚兵衛、その子孫の方が残した資料について現在十代目の中好幸氏、中九兵衛氏がお持ちである。開館以来、毎年その資料をお借りして大和川つけかえをテーマにした秋の企画展を開催している。大阪の小学校4年生が大阪の郷土史の一環として大和川のつけかえについて時間を割いて学習している。小学校4年生の社会見学として多数の小学校が毎年来られ、資料館の展示を見て市役所前まで歩きつけかえ地点を見ている。本資料館においても年間8000人から9000人くらい、80校くらいが大和川の展示を見学に来られている。中氏においても資料が散逸するのを心配している。どこかで預かって欲しいが、できれば柏原市でと。複数の所から申し入れがあるが中氏自身は柏原市に預けたい。小学生のために公開して活用して欲しいというのが最大の理由である。6月に話したところ、資料を一括で預かっていただけるならば寄託したい。つけかえに直接関わる資料は20点くらい。中家には今の東大阪市今米その周辺の新田開発、今米村関係の古文書も多数有り、それらも含めて。将来的には寄贈したいが当面は寄託としたい。300年間中家に保管していた資料が手許からなくなるのは忍びがたい、親からも言われている、ので当面は寄託とし1年更新としたい。写真の使用、掲載、貸し出しの場合は中氏の了解を得るよう。これらの条件であれば中氏は寄託したいという希望で、文化財課としては問題ないと、この9月にお借りする時から1年更新で寄託資料として預かるとなっている。文化財課としては審議会でご検討の上、この資料を市指定文化財にしていきたい。中氏も指定していただければ有り難いとおっしゃっている。今後の予定としては9月5日にお預かりし、寄託期間は1年、8月まで。今年度預かった物の目録を作り、目録に基づいて諮問の上、市指定を目指したい。近世の資料だけで400点あまりある。問題点として直接柏原市に関係のない新田開発資料も含めてそれが適切かどうか。目録を整理した時点で審議会でご検討いただいて市指定に持って行きたいと考えている。

<塚口> 中家から柏原市へ資料一括を寄託したいと、うれしい話である。東大阪市とトラブルが起こる可能性はないのか。

<安村> 中家と東大阪市は何度もトラブルを起こされている。中家が東大阪市と八尾市を全く信頼なさっていない。資料は貸し出さない。中氏は自分の所の資料を適切に評

価して展示、公開して協力してくれてきた柏原市に是非預けたいというのが中氏のご意向。秋のリーフレットの4ページ目に掲載している資料もすべて中家の資料。多数資料をお借りして並べている。

<岩城> 中家資料は大和川つけかえはよくご存知のところで、近世だけでなく大規模な河川施策という点で土木史上にも非常に大きなもの。日本の近世がどういう時代であったのかを考える上でも、17世紀の社会が終わって18世紀に入った、運動自体は早くから起きているが、実際には18世紀で、社会変化を考える上でも非常に大きな問題で研究の課題もたくさんあって非常に大きなテーマ。東大阪、八尾との関係はよく存じ上げないが、大和川のつけかえについてかつて事実に基づかないものがあって、中氏自身は非常にそれを憤慨されていて、資料が公にされることはなかった。柏原市とは長い信頼関係があってはじめて柏原市にということになった。所有者との良好な長い関係があるという点では柏原市が引き継がれて市の文化財に指定されるというのは最もふさわしい。市役所の前がつけかえ地点であり、淀川も含めて近畿地方で最大の堤防があった場所だと思われるのでそういう意味でも大事である。つけかえの資料は全体の中の何十点であるが、資料というのはどこかにいってしまうと大変なことになるので、当然中家がつけかえに果たした役割を考える上でも、新田関係の他の文書も一括して市の文化財指定をめざすということで。実際展示をしていって、まずいものがあればその都度。とりあえず全点を文化財指定する方向でいいと思う。

<綿貫> まとまってあるというのは価値があると思う。信頼関係でもって所有者がそれを望んでいるのであれば特に問題も無く、柏原がそれを遠慮してしまった場合には散逸が心配される。資料の活用という点でも是非これはやっていただきたい。

<安村> 他市の資料も入ることになるが、一括で預かって一括で指定の方向でいきたいと事務局では考えている。まずは預かって目録を作成し、岩城先生、綿貫先生にもご意見を頂いて審議会に諮るか、慎重にはいきたいと思うが方向性としてはそうしていきたい。

<塚口> バラバラにすると意味がなくなってしまう。一括して保存していく。次回は市の文化財に指定する方向で検討する。3番目、鳥坂寺跡の範囲確認調査について。

<桑野> 現在鳥坂寺を発掘調査している。鳥坂寺はここから北西に数百メートル離れた同じ高井田の地域にある7世紀後半に建てられた古代寺院跡。行政的には地名から高井田廃寺と呼んでいるが、文献学的な研究と鳥坂寺と書かれた墨書土器が20年ほど前に出土した。その成果も含めて高井田廃寺イコール鳥坂寺という。昭和30年代にこの地域の宅地開発の予定がありそれに伴って柏原中学校、大阪府教育委員会、奈良文化財研究所の3者で調査して非常に残りのいい寺の跡がでて宅地開発は中止になり、埋め戻されて現在に至っている。柏原市としてはこれを将来的に保存、活用の方向を開いていきたい。国の史跡にしていきたいと現在範囲確認の発掘調査を実施している。

国の史跡になっていなかったことが不思議なくらい残りがいい。現在奈良で平城遷都1300年祭をやっているが大極殿の復元などでも参考にされているほど基壇等の残りがいい寺の跡である。昨年度から実施しており、その際に一番大きな重要な点として講堂跡の周辺を調査し回廊が見つかったのが一番大きな成果。従来は、尾根、谷を利用して伽藍全体を囲む広い平坦地がとれないであろうと、回廊がないのではと考えられていたが、昨年度の調査で回廊がでた。回廊は講堂に取り付いていることはわかったが、南側の金堂との関係はどうであったか、寺域全体でどう位置づけるのかという問題が発生し、今年度範囲確認調査を行った。今年度は金堂の南側を中心に範囲確認調査を行っている。金堂の北側、南側に階段が付いている。今年度の調査は南側の階段周辺、さらにその南側で広い面積ではないが現在も調査中。その結果、金堂の南側、谷川に向かうかなり急傾斜に下っている面を造成して、土、礫でもって広い平坦面を作っているのがわかった。造成土の中に前期古墳の埴輪であるとか瓦であるとか前期古墳で使われたと思われる亀ノ瀬、芝山の安山岩の板石が混じってかなりでていいる。おそらく金堂、講堂が乗っている尾根上にかつて前期古墳、小型の前方後円墳かも知れないが、それを潰した土を利用して金堂を作っていることが今回の調査で新たにわかった。しかも金堂の南側が広い範囲で平坦地が造成されていることから、確実な証拠はないが地形及び建物の配置等を考えていくと、そこに中門を考えてもいいであろう。斜面のかなり上の方、金堂の南側に中門が乗っていたと現在は考えている。8月7日に現地説明会を開催し、およそ200名強に見学していただいた。今後は成果をまとめて来年度7月頃に文化庁に国史跡の申請を上げる方向で進めている。順調にいくと2月ないし3月頃に官報告示され、国の史跡に指定されることになろうかと思う。

<置田> この図面の北は磁北ですか、真北ですか。

<桑野> ほぼ真北です。

<塚口> 教育委員会にあっては史跡申請を行うに当たって審議会の承認を得ておきたいと伺っている。承認してよろしいでしょうか。(出席委員承認)。4番目の国登録文化財天理教北阪分教会について。

<石田> 柏原市内には国登録有形文化財が物件としては5件ある。天理教北阪分教会玉手山丘陵の北端、柏原市片山町にある。家並みの中に塔屋が頭一つ突き出ており、一種変わった景観となっている。平成17年7月に国の登録にいただいた。現在は天理教の教職舎、倉庫、離れとして使われているが、昭和13年頃に大阪市内でメリヤス業を営んでいた個人が別邸として建てた。通常の鉄筋コンクリートの建築とは異なり、建物へのアプローチに元々池があり橋が架かっていた。その橋の欄干だけ、しかも片方だけ残っているが、欄干の所に網状の物が見えるがそれが鉄筋の代わりに躯体として塗り込まれている。こうしたものをモーラ構造と呼ぶ。建物の壁にこうした網が塗り込まれている特徴的な建物である。構造だけでなく外観上も和風なのか洋風なのか、

内部も洋室があったり純和風の部屋があったりと非常にバラエティに富んでいる変わった建物である。庭園も何度も所有者が代わって廃れた状態になっているが、重森三玲が手を付けた庭園であった。教職舎、倉庫、離れ、欄干が登録になっている。この土地の西側、隣地との境界に南北方向に延長74.4メートル、高さ2メートル前後の塀があるが、ここにも左官彫刻が施されていると同時に、モルタルの厚塗りの内部に竹を編んだものが骨組みとして入っていることを確認している。竹筋が構造体として入っていることがわかった。塀についても追加で登録してはどうかと考えている。その方向性は所有者の了解を口頭で受けている。審議会で希少性、構造の特異性を評価していただいた上で正式に手続きをとっていきたい。

<橋寺> 歴史的建造物の構造に詳しい同じ関西大学の西澤先生にも尋ねた。先生は本体が登録になる時に見ておられ、今回追加予定の塀も気になっていたと。非常に構造の内部が竹で珍しい。大正の末から昭和初期は色々な構造、竹筋コンクリートとか金網建築とかが試された時代であった。この時代の工夫が表れた構造ではないか。一続きの物として残っているのなら塀も含めて追加した方がいい。構造的に珍しいのと同時に左官の細工も非常に見応えがあったとコメントを頂いた。状況は崩れつつあるような気がするが、元の状態がちゃんとわかる状態であるので緩やかな保護はしていった方がいい。

<塚口> 特に異論がないので追加登録について審議会では承認。

<石田> 今日は諮問を特に設けていなかった。安福寺についてはまだ了解を頂く場が必要である。ご報告した物件については口頭では指定、登録のご了解を頂いているので次回の審議会に向けて先生方に情報提供することで、次回で正式な指定に持って行こうと思う。前回の審議会で答申を頂戴した太平寺の葡萄酒醸造用具については、答申後の手続きを踏まえ6月25日付で正式に市の指定文化財にした。先週8月11日には市川先生にお見え頂いて現地で使用方法、名称等の聞き取り調査を引き続きしている。冒頭の夾紵棺の話であったように今後安福寺と関わりを持ちたい。盗難等々について懸念いただいている長谷先生にも足を運んでいただきたい。今日の審議、報告はここまで。

(会議終了後、展示中の安福寺所蔵夾紵棺を実見)

以上